



OFFICIAL NEWS LETTER

7 Aug. 2014 Vol.218

J.LEAGUE™ NEWS



© J.LEAGUE PHOTOS



© J.LEAGUE PHOTOS



© J.LEAGUE PHOTOS

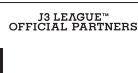
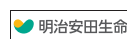
ファン・サポーター待望のJ1リーグ戦が再開した。写真左は第15節の浦和 vs 新潟、同右上は第16節の鳥栖 vs 川崎F、同右下は第16節のG大阪 vs 清水

J1リーグ戦再開。夏の戦いが本番

FIFAワールドカップによる中断期間が終了。暑さの中で国内の覇権争いがますます熱い

SAMURAI BLUE(日本代表)が出場した2014 FIFAワールドカップブラジルが終了し、中断していたJ1リーグ戦が7月19日に本格的に再開した。日本代表選手たちも所属クラブに戻り、リーグ戦再開を待ちわびたファン・サポーターもスタジアムに詰め掛けている。中断期間前のいい流れを継続したいチーム、あるいは新監督や新加入選手を迎えて心機一転、巻き返しを図るチーム。こうした各チームの思惑が交錯し、どのようなドラマが演じられるのか興味は尽きない。スタジアムには夏本番の暑さを上回る熱気があふれ、ピッチの選手たちも勝利を目指して走り抜く。それぞれの目標達成に向けて、中盤戦にあたる夏の戦いは大きなヤマ場といえるだろう。(2ページに関連記事)

J.LEAGUE™ TOP PARTNERS





通算得点記録を伸ばす広島島の佐藤(右)。得点ランキングも上位



名古屋に移籍して活躍するレアンドロ・ドミンゲス



鳥栖は最多入場者記録を更新。この日はイベントの関係でスタンドは赤く染まった



電子通信システムの使用開始

J1リーグ戦再開。夏の戦いが本番

FIFAワールドカップによる中断期間を終えたJ1リーグ戦は、7月15日にAFCチャンピオンズリーグの影響で延期となっていた第12節の2試合を行い、同19日の第15節の9試合で本格的に再開した。

リーグ戦は各節ごとに豊富な話題を提供している。浦和レッズは第16節の徳島ヴォルティス戦で、J1新記録となる7試合連続無失点を

達成。サンフレッチェ広島のFW佐藤寿人は第15節の大宮アルディージャ戦で2点をマークし、J1通算を141点として歴代得点ランキング3位に浮上。サガン鳥栖はベストアメニティスタジアムで行われた第16節の川崎フロンターレ戦で2万3277人を集め、クラブ史上最多入場者を記録した。

新監督や新加入選手にも注目が集まり、J1・



札幌に加入した小野のプレーも楽しみ



J3第18節の秋田 vs 町田。町田は首位

J2リーグ戦でかねて発表のあった電子通信システム(審判無線)の使用も始まった。J2では元日本代表のMF小野伸二のコンサドレ札幌入りに話題に。明治安田生命J3リーグも熱戦が続いている。各試合会場では、夏にふさわしいイベントもファン・サポーターを楽しませている。



ウォーターパーク(ノエビアスタジアム神戸)



チアリーダーが浴衣でお出迎え(IAIスタジアム日本平)

2014 FIFAワールドカップブラジルを終えて ～J1リーグ戦再開にあたり～

Jリーグチェアマン 村井 満

2014 FIFAワールドカップブラジルは、ドイツの6大会ぶりの優勝で幕を閉じました。

1993年にJリーグがスタートし、日本代表は98年以降5大会連続でワールドカップ出場を果たしました。それは、多くの喜びや悲しみとともに、さまざまな経験を積み重ねて成長してきた歴史です。それだけに今大会への期待は大きいものがありましたが、残念ながらグループステージ敗退となりました。しかし、全国で多くの方がこの悔しさを共有したことは日本サッカーにとって「財産」でもあります。今こそ、私たち自身の立ち位置を冷静に見つめ直し、新たなチャレンジをスタートするべき時です。

Jリーグが長らく参考にしてきたドイツの今大会の躍進は、同国サッカー界の長年の努力が結実したものです。中長期視点で設計された国内の育成システムと、それを支えるサッカー協会とリーグの協働関係。平均入場者数世界一という国内リーグ・ブンデスリーガの活況と代表チームのワールドカップ優勝は無縁ではありません。今回のドイツ代表は、23人のうち実に16人がブンデスリーガで活躍しています。ワールドカップは、まさに出場国の総合力の戦いです。

今回16強入りしたメキシコとアメリカにも注目しています。メキシコには、少年がプロになるまでに約百試合の国際試合を経験させるクラブもあります。厳しいアウェイの環境でしごきを削る修羅道の経験は、地政学的なハンディがある日本に決定的に不足しています。またアメリカは、プロスポーツ大国としての優れたマーケティング力で国内リーグを軌道に乗せ、それに伴ってレベルも向上しています。両国に限らず、世界の各国が自国の置かれた環境を分析し、代表強化と国内リーグ活性化の両立を目指してそれぞれの国情に合った最適解を模索しています。

日本も4年後、8年後のみならず、10年、20年単位で日本サッカーのあり方を考えるべき時期にあります。将来を担う有望な若手選手は日本全国にたくさんいます。育成システムの整備や国際経験機会の創出などを通じ、このタレントたちを継続的に育成していくことが重要です。そのために日本サッカー協会とJリーグがこれまで以上に協働していきます。

Jリーグは日本サッカーの土台であり母体です。日本サッカーの発展のためには、Jリーグのさらなるステップアップとスケールアップが不可欠です。毎節のリーグ戦ではこれまで以上に熱く激しいタフな試合を実現する。そしてJクラブがAFCチャンピオンズリーグやFIFAクラブワールドカップという世界の厳しい環境で勝ち抜いていく。Jリーグは世界水準で戦うことを常に意識して挑戦していかなければなりません。

ワールドカップが終わり、J1リーグ戦の再開にあたって決意を新たにしております。サッカーを愛する多くの方々と共に、一歩一歩前進を続けてまいります。



東日本大震災被災地の現状を伝える復興支援写真展も各会場で実施

2014 Jリーグ 月間ベストゴール／コカ・コーラ Jリーグ月間MVP

各月のJ1リーグ戦で最も優れたゴールを表彰する「月間ベストゴール」に、5月度はFW 小林 悠(川崎フロンターレ)が第13節の鹿島アントラーズ戦(5月10日)で3分に決めた得点を選ばれた。6月度はJ1が開催されず、選考はなかった。月間ベストゴールは、年間で最も優れたゴールに与えられる「最優秀ゴール賞」のノミネートゴールとなり、同賞はシーズン終了後に開催されるJリーグアウォーズで表彰される。



「このような賞は初めてなので大変光栄」と小林



赤嶺は先発した2試合で決勝点を挙げ4連勝の立役者に



6試合で4得点の船山は6試合負けなしに貢献



金森は「この賞を自信にこれからも頑張る」とコメント

また、各月のリーグ戦(J1、J2)において最も活躍した選手を表彰する「コカ・コーラ Jリーグ月間MVP」は、5月度のJ1はFW

赤嶺真吾(ベガルタ仙台)、同J2はFW船山貴之(松本山雅FC)、6月度のJ2はFW金森健志(アビスパ福岡)が選出された。6月度は

J1が開催されず、選考はなかった。J1受賞者には30万円、J2受賞者には20万円の賞金が授与される。

Gothia Cup 2014でU-14 Jリーグ選抜が優勝

写真：©山口剛生 / Agence SHOT



歴史のある国際大会で見事に優勝

スウェーデンのイエテボリで7月14～19日に開催された「Gothia Cup 2014」のU15 Boysのカテゴリー(208チームが出場)決勝

8200人の選手が、イエテボリ市内にある110のピッチで計4795試合を行った。過去にはシャビアロンソ(スペイン)、アンドレア・ピ

で、U-14 Jリーグ選抜が2-2の後のPK戦でTSVハベルセ(ドイツ)を5-3と下し、見事に優勝を飾った。同大会は1975年から行われている世界最大規模の国際ユース大会。今大会は73カ国、1660チーム、3万

ルロ(イタリア)ら、世界的な名手も出場した。U-14 Jリーグ選抜は恒例の海外キャンプの一環で参加し、同大会での日本チームの優勝は初めて。大会レポートは次号に掲載予定。



帰国したチームを村井 満 Jリーグチェアマンが空港で出迎えた

活発に東南アジア諸国と交流

Jリーグが後援した「日本ミャンマー外交関係樹立60周年記念 日本財団チャリティマッチ ヤンマーカップ」が6月28日にミャンマーのヤンゴンで開催された。同国在住の日本人を含む約1万2千人の入場者が観戦し、セレッソ大阪がミャンマー代表に1-0で勝利した。

大会開催に伴い、ファン・サポーターからレブリカユニフォームなどを募集した。集まった746枚を持って試合翌日から各地を訪問。C大阪普及部コーチの協力を得て、現地の養育施設などでサッカー教室を開催し、子どもたちにウエアをプレゼントした。

また、ヤンマー株式会社や、Jリーグトップパートナーの株式会社ジェーシービーをはじめとする大会スポンサーの協力を得て、ユニフォーム



ファン・サポーターの厚意で集まったウエアを身に着け、大喜びのミャンマーの子もたち

やスポーツ用品を提供。協賛金の一部は、現地学生の奨学金などに使用される。Jリーグからは村井 満チェアマンらが随行し、ミャンマーサッカー協会をはじめとする現地関係者を訪問した。

さらにJリーグは、6月19～20日にタイ国境ウンピラム難民キャンプで開催された同キャンプ「サッカーフェスティバル」(主催:公益社団法人 シャンティ国際ボランティア会メソット事務所)を後援した。サッカー教室、交流試合を開催し、難民キャンプの子どもたちにサッカー絵本の読み聞かせを行い、サッカーを通じて読書への関心も高める活動も実施した。

U-16・U-15・U-14・U-13 2014 Jリーグ選抜
ミャンマー／ブラジル／スウェーデン／ベトナム 海外キャンプに派遣

Jリーグは、7月から9月にかけて、U-16 Jリーグ選抜をミャンマー、U-15 Jリーグ選抜をブラジル、U-14 Jリーグ選抜をスウェーデン(上記参照)、U-13 Jリーグ選抜をベトナムにそれぞれ派遣し、海外キャンプを実施。同キャンプは、J1・J2クラブのアカデミーに所属する選手を選抜し、国際試合の経験を通じて競技力向上の機会を与えるだけでなく、海外文化に触れ現地の人々と交流する経験を通じて豊かな人間性を育むことを目的としている。また、世界におけるJクラブのアカデミー選手のレベルを把握し、今後の選手育成・指導に還元する。各キャンプの詳細については、次号以降で紹介する予定。

Integrity of Sport シンポジウムに村井チェアマンが登壇

Jリーグが後援する独立行政法人日本スポーツ振興センター主催のシンポジウム「『Integrity of Sport シンポジウム』～スポーツの完全性、高潔性を護り、その価値を高めていくために～」が6月7日に行われ、村井 満 Jリーグチェアマンがパネリストとして参加した。

シンポジウムは、八百長・違法賭博、ドーピング、ガバナンス欠如、暴力などのスポーツ界の脅威から、スポーツの完全性や高潔性(Integrity of Sport)を守ることの重要性を周知し、公正・公平なスポーツの発展を図るため、国際サッカー連盟(FIFA)協力のもとで開催。スポーツに対するクリーンでフェアな姿勢を積極的に体現することをテーマに、パネルディスカッションなどが行われた。

実行委員選任

Jリーグは、7月15日付でカタール・富山の実行委員を清原邦彦氏から酒井英治(さかい ひではる)氏へ変更することを承認した(5月度 Jリーグ理事会で承認)。

実行委員		敬称略
クラブ名	変更前	変更後
カタール・富山	清原 邦彦 株式会社カタール・富山 代表取締役社長	酒井 英治 株式会社カタール・富山 代表取締役社長 ※7月15日付で同職に就任

参与選任

Jリーグは、7月15日付でカタール・富山の実行委員を退任した清原邦彦氏を参与に選任した(5月度 Jリーグ理事会で承認)。

参 与		敬称略
氏名	実行委員在籍期間	
清原 邦彦	2009年5月～14年7月(在任期間5年1ヵ月 ※2014年7月15日時点)	

第1回 Jリーグ・Kリーグ研修会を開催

JリーグとKリーグは、アジアサッカー全体の発展を視野に、日本と韓国のサッカー競技力向上および国内リーグ発展に向けた両リーグ間の情報共有、協働の促進のために、継続的な研修会を開催することとなった。本研修会第1回として、Kリーグスタッフが来日し、7月2～3日に村井 満 Jリーグチェアマンや日本サッカー協会(JFA)関係者、各部担当者と情報共有、意見交換などを行った。

研修会では、両国のサッカーの課題や展望を共有し、活発な意見が交わされた。Jクラブのファイナンスフェアプレーを支える上で重要な役割を果たしているとして、参加したKリーグスタッフからはJリーグのクラブライセンス制度についての質問が相次いだ。JFAとJリーグにとって重要な課題であるAFCチャンピオンズリーグについての意見交換も行われた。

～3つのフェアプレー宣言～ Jクラブでのソーシャル・フェアプレーに関する人権研修で法務省と協働

Jリーグが4月22日に発表した「3つのフェアプレー宣言」に基づき、各クラブでの「ソーシャル・フェアプレー」に関する人権研修において、法務省人権擁護局とこれまで以上の協力体制を構築することとなった。Jリーグおよび各クラブで選任されたコンプライアンスオフィサーを中心に、所属する全員を対象としてソーシャル・フェアプレーの徹底に関する研修を実施していく。

Jリーグは、本研修を通じてソーシャル・フェアプレーの徹底を図るとともにこれまで同様、類する事案に対して一つ一つ慎重に対応することで地道に啓発を続け、学ぶことを通じて、より一層フェアでオープンなリーグを目指す。

学校法人立命館との業務提携を締結

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ(以下、Jリーグ)は、学校法人立命館(以下、立命館)と業務提携を締結した。立命館は、2大学(立命館大学、立命館アジア太平洋大学)、4高校、4中学校、1小学校の総合学園で、Jリーグは立命館全体と業務提携を行う。

業務提携は、Jリーグが掲げる「アジア戦略」のさらなる発展や、スポーツ界で活躍する人材の育成などを中心に、「教育・研究・文化・スポーツ振興・発展」「人材育成」「地域振興」「国際交流」「学生・生徒などの人的交流」の5項目。Jリーグと立命館が行う具体的な取り組みや事業については、双方で協議の上、決定する。

マルハンカップ 第6回パワーチェアーフットボールブロック選抜大会を後援

Jリーグは7月29日に開催した理事会で「マルハンカップ 第6回パワーチェアーフットボールブロック選抜大会」(主催:日本電動車椅子サッカー協会)を後援することを決定した。日本における電動車椅子サッカーの普及振興およびワールドカップに向けた技術向上、選手の育成強化を目的とし、8月24日(日)に鹿児島アリーナで行われる。

2014 Jリーグヤマザキナビスコカップ

2014 Jリーグヤマザキナビスコカップは6月1日に予選リーグを終了し、決勝トーナメントに進出する8チームが出そろった。予選リーグを突破したのは、グループAからガンバ大阪、ヴィッセル神戸、同Bから浦和レッズ、柏レイソルの4チーム。これにAFCチャンピオンズリーグ2014参加のため準々決勝からの出場となる川崎フロンターレ、横浜F・マリノス、セレッソ大阪、サンフレッチェ広島を加えた計8チームが準々決勝を戦う。ホーム&アウェイによる準々決勝は9月3日(水)、7日(日)に開催。対戦カードについては次号でお知らせする。

アイデムカップ2014フットサル大会を後援

Jリーグは7月29日に開催した理事会で、Jリーグトップパートナーである株式会社アイデムが主催する「アイデムカップ2014フットサル大会」を後援することを決定した。同大会は、求人情報を通して地域を活性化するというアイデムの理念を体現すべく、さまざまな地域でことし12月まで開催されており、就職活動を控えた大学生同士のコミュニケーションを広げる役割を果たす。また、ブラインドサッカー体験の場も設け、障がい者スポーツを認知する機会も提供している。

2014 コカ・コーラウエスト サンフレッチェカップ(U-15/U-12)を後援

Jリーグは7月29日に開催した理事会で、昨年に引き続き「2014 コカ・コーラウエスト サンフレッチェカップ(U-15/U-12)」(主催:株式会社サンフレッチェ広島)を後援することを承認した。同大会はU-15およびU-12年代の理想的な試合形式を用いたゲーム環境を整え、個の育成および指導者の交流、情報共有を行うとともに、豊かな人間性を育むことを目的に開催される。

第37回 日本スリーデーマーチを後援

Jリーグは7月29日に開催した理事会で、Jリーグ百年構想パートナーである朝日新聞社などが主催する「第37回 日本スリーデーマーチ」を後援することを決定した。日本最大の国際色豊かなウオーキング大会で、老若男女が健やかな心身を保つための「生涯スポーツ」を楽しみ、海外からの参加者と国際交流の実体験を目的に行われるイベント。11月1日(土)～3日(月・祝)に東松山市立松山第一小学校を中央会場に行われ、三つのルートを歩く。

大阪人権博物館企画展「Say No To Racism ～人種差別にレッドカード～」を後援

Jリーグは7月29日に開催した理事会で、公益財団法人大阪人権博物館、大阪弁護士会、一般財団法人大阪府サッカー協会が共催する大阪人権博物館企画展「Say No To Racism～人種差別にレッドカード～」を後援することを決定した。同イベントは、人権について話し合い、考える機会を提供することを目的に、9月20日(土)まで大阪人権博物館で開催されている。また、8月30日(土)に開催のシンポジウムには村井 満 Jリーグチェアマンが参加予定。

【出版のお知らせ】

「百年構想のある風景」

著者: 傍士 銃太

発行: 株式会社ベースボール・マガジン社

定価: 1500円+税

前Jリーグ理事の著者が2007年12月～14年1月にJリーグ公式ホームページに連載した150回にわたるコラムの中から、加筆修正して編集。「Jリーグが目指す、スポーツと地域の絆を紡ぎだす珠玉のコラム」(村井 満 Jリーグチェアマン)。



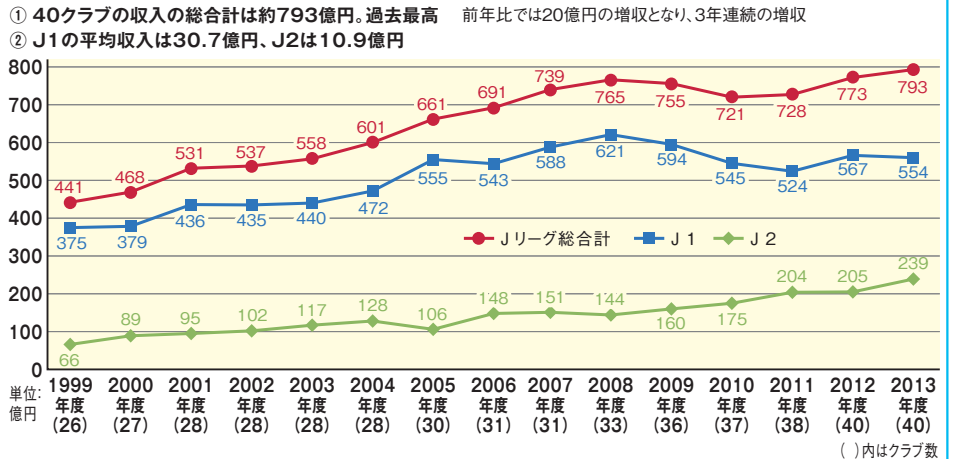
2013年度Jクラブ経営情報開示

JリーグはJクラブ経営の透明性向上のため、クラブ別の個別情報を発表している。2013会計年度分は7月22日に発表。メディア向けに開示内容の説明会が行われた。

1. 2013シーズンの主なトピックス

- ① J1ではサンフレッチェ広島が2連覇
横浜F・マリノスがJ1リーグ戦最多入場者記録更新(2013年11月30日 vs アルビレックス新潟 @日産スタジアム 6万2632人)
- ② J2に降格したガンバ大阪が優勝して1年でJ1に復帰
G大阪を迎えたホームクラブで、最多入場者記録を更新するクラブ続出(松本山雅FC、カターレ富山、FC岐阜、ガイナレ鳥取、ファジアーノ岡山、V・ファーレン長崎)
- ③ J3発足が決定
2014シーズンより11クラブを新たに迎え入れ、「Jリーグ・アンダー-22選抜」を加えた12チームでスタート
- ④ 2015シーズンより、J1を「2ステージ制のリーグ戦およびポストシーズン」にすることを決定

2. 全クラブの営業収入(売上高)の合計



3. 決算数値(40クラブ合計)の概要

広告料収入・入場料収入の伸びが、収入規模の拡大に寄与
・40クラブの合計当期純利益は10億8700万円で前年比増
・収入に合わせてチーム人件費も増やし、「拡大均衡型」の経営になっている。

		J1+J2合計			
科 目		2012年度	2013年度	増減額	増減比
損益総括	営業収益	77,333	79,369	2,036	102.6%
	広告料収入	35,096	37,225	2,129	106.0%
	入場料収入	15,324	16,423	1,099	107.1%
	Jリーグ配分金	6,169	6,079	▲90	98.5%
	アカデミー関連収入	4,136	4,470	334	108.0%
	その他収入	16,611	15,174	▲1,437	91.3%
	営業費用	76,639	79,577	2,938	103.8%
	チーム人件費	33,309	35,294	1,985	105.9%
	試合関連経費	6,650	6,749	99	101.4%
	トップチーム運営経費	8,002	8,414	412	105.1%
損益総括	アカデミー運営経費	2,864	3,045	181	106.3%
	女子チーム運営経費	228	263	35	115.3%
	販売費および一般管理費	25,585	25,810	225	100.8%
	営業利益	692	▲207	▲899	—
	営業外収益	693	749	56	108.0%
	営業外費用	368	145	▲223	39.4%
	経常利益	1,015	398	▲617	39.2%
	特別利益	250	1,252	1,002	500.8%
	特別損失	411	45	▲366	10.9%
	税引前当期利益	855	1,604	749	187.6%
損益総括	法人税および住民税	450	518	68	115.1%
	当期純利益	403	1,087	684	269.7%

※数値は、各クラブの百万円単位の金額を単純合計したものであり、端数処理の関係で、合計数値が一部、一致しないところがある。

4. 3期連続赤字・債務超過クラブ

赤字クラブは減少、債務超過クラブは増加
2014年度末に「3期連続赤字」または「債務超過」になる可能性を払拭できないクラブは、2015シーズンのJ1、J2ライセンスが交付されない場合がある。

J1・J2合計	2011年度	2012年度	2013年度
[クラブ数]	[38]	[40]	[40]
赤字クラブ数	18	12	11
3期連続赤字クラブ数	4	5	4
債務超過クラブ数	11	9	11

J1	2011年度	2012年度	2013年度	クラブ名(2013年度)
[クラブ数]	[18]	[18]	[18]	
赤字クラブ数	8	5	4	湘南・清水・名古屋・鳥栖
3期連続赤字クラブ数	2	3	1	名古屋
債務超過クラブ数	3	3	3	横浜FM・鳥栖・大分

J2	2011年度	2012年度	2013年度	クラブ名(2013年度)
[クラブ数]	[20]	[22]	[22]	
赤字クラブ数	10	7	7	栃木・群馬・東京V・G大阪・神戸・福岡・長崎
3期連続赤字クラブ数	2	2	3	栃木・群馬・神戸
債務超過クラブ数	8	6	8	札幌・栃木・群馬・岐阜・神戸・福岡・北九州・熊本

5. クラブの収入と入場者との関係

J1		
営業収入 (単位:百万円)	平均単価 入場料収入÷総入場者数(円/人)	入場率 入場者数÷入場可能数
1 浦和 5,786	1 浦和 3,380	1 川崎F 78.9%
2 横浜FM 4,315	2 柏 3,027	2 仙台 74.8%
3 名古屋 4,226	3 仙台 2,995	3 甲府 73.1%
4 鹿島 4,122	4 C大阪 2,982	4 大宮 72.6%
5 F東京 3,545	5 名古屋 2,682	5 磐田 68.1%
6 柏 3,412	6 鳥栖 2,681	6 柏 67.7%
7 磐田 3,298	7 鹿島 2,680	7 清水 67.6%
8 大宮 3,228	8 磐田 2,408	8 新潟 62.6%
9 川崎F 3,214	9 横浜FM 2,287	9 浦和 59.8%
10 C大阪 3,213	10 清水 2,176	10 C大阪 58.8%
11 広島 3,198	11 広島 1,963	11 湘南 53.5%
12 清水 3,084	12 川崎F 1,908	12 鳥栖 49.8%
13 新潟 2,548	13 甲府 1,879	13 F東京 49.7%
14 仙台 2,429	14 F東京 1,849	14 名古屋 49.5%
15 鳥栖 1,704	15 大分 1,827	15 横浜FM 44.3%
16 甲府 1,481	16 大宮 1,801	16 広島 43.9%
17 大分 1,406	17 湘南 1,561	17 鹿島 43.2%
18 湘南 1,191	18 新潟 1,518	18 大分 37.2%

J2		
営業収入 (単位:百万円)	平均単価 入場料収入÷総入場者数(円/人)	入場率 入場者数÷入場可能数
1 G大阪 2,786	1 G大阪 1,802	1 G大阪 58.5%
2 千葉 2,330	2 千葉 1,680	2 岡山 55.4%
3 神戸 1,960	3 京都 1,569	3 松本 54.3%
4 京都 1,930	4 札幌 1,560	4 千葉 51.2%
5 東京V 1,236	5 東京V 1,532	5 水戸 45.7%
6 徳島 1,211	6 福岡 1,497	6 神戸 40.4%
7 横浜FC 1,152	7 神戸 1,402	7 横浜FC 39.7%
8 札幌 1,071	8 栃木 1,398	8 京都 38.9%
9 山形 1,041	9 横浜FC 1,390	9 岐阜 34.8%
10 岡山 1,034	10 山形 1,370	10 札幌 34.4%
11 松本 939	11 北九州 1,320	11 鳥取 34.1%
12 栃木 876	12 鳥取 1,154	12 愛媛 34.0%
13 福岡 871	13 徳島 1,150	13 山形 33.5%
14 長崎 718	14 群馬 1,120	14 栃木 32.2%
15 富山 701	15 長崎 1,019	15 北九州 31.1%
16 北九州 686	16 水戸 926	16 長崎 30.4%
17 熊本 680	17 熊本 902	17 福岡 25.6%
18 鳥取 646	18 岡山 894	18 富山 24.1%
19 岐阜 576	19 富山 894	19 群馬 23.4%
20 愛媛 547	20 松本 858	20 徳島 21.9%
21 水戸 508	21 岐阜 779	21 熊本 20.9%
22 群馬 469	22 愛媛 675	22 東京V 12.1%

入場率は、ホームスタジアムで実施された試合の入場者数の平均を、ホームスタジアムの入場可能数で除した数値である。なお、ホームスタジアムが二つ以上ある場合には、加重平均して算出している。

2013 (平成25)年度 Jクラブ個別情報開示資料

(単位:百万円、▲: 損失)

クラブ名		J1																			J1 総合計	J1 平均
		仙台	鹿島	浦和	大宮	柏	F東京	川崎F	横浜FM	湘南	甲府	新潟	清水	磐田	名古屋	C大阪	広島	鳥栖	大分			
決算月		2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 3月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2013年 12月期	2014年 1月期	2014年 3月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期			
1. 損益総括																						
損益 総括	営業収益	2,429	4,122	5,786	3,228	3,412	3,545	3,214	4,315	1,191	1,481	2,548	3,084	3,298	4,226	3,213	3,198	1,704	1,406	55,400	3,078	
	広告料収入	901	1,864	2,319	2,296	1,947	1,422	1,702	1,513	387	683	963	1,219	1,645	2,457	1,499	1,373	632	680	25,502	1,417	
	入場料収入	757	748	2,132	341	646	788	540	1,069	263	403	674	523	446	736	954	541	548	370	12,479	693	
	Jリーグ配分金	225	235	258	214	204	206	218	228	191	208	215	225	206	221	220	232	234	202	3,942	219	
	アカデミー関連収入	88	269	15	142	71	422	164	455	0	36	143	319	249	258	0	99	74	48	2,852	158	
	その他収入	458	1,006	1,062	235	544	707	590	1,048	350	151	553	798	752	555	540	953	216	106	10,625	590	
	営業費用	2,431	4,081	5,633	3,226	3,380	3,482	3,170	4,306	1,211	1,460	2,636	3,140	3,233	4,304	3,201	3,072	2,039	1,191	55,196	3,066	
	チーム人件費	1,169	1,701	2,016	1,606	2,118	1,637	1,557	1,701	530	707	1,077	1,251	1,369	2,348	1,212	1,449	1,012	556	25,017	1,390	
	試合関連経費	144	384	497	226	198	373	174	341	82	101	283	208	328	283	464	263	273	75	4,698	261	
	トップチーム運営経費	189	310	434	472	266	284	262	443	98	172	277	228	253	448	652	279	129	144	5,340	297	
	アカデミー運営経費	68	166	102	68	40	255	75	314	0	21	128	197	182	191	0	126	23	70	2,026	113	
	女子チーム運営経費	56	0	62	0	0	0	0	0	0	0	39	0	0	0	0	0	0	2	159	9	
	販売費および一般管理費	805	1,520	2,522	854	758	933	1,102	1,506	501	459	832	1,256	1,101	1,034	873	954	602	344	17,956	998	
	営業利益	▲2	41	153	2	32	63	44	9	▲20	21	▲88	▲56	65	▲78	12	126	▲335	215	204	11	
	営業外収益	30	47	12	9	16	29	2	3	12	9	148	19	23	24	0	26	38	13	460	26	
	営業外費用	1	2	3	10	35	3	0	12	3	6	9	2	5	4	4	5	0	6	110	6	
	経常利益	27	86	161	1	13	89	46	0	▲11	24	51	▲39	83	▲58	8	147	▲297	222	553	31	
	特別利益	0	0	0	0	0	0	0	1,000	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	1,007	56	
	特別損失	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	0	0	0	1	0	0	0	1	22	1	
	税引前当期利益	27	86	161	1	13	89	46	1,000	▲11	11	51	▲39	82	▲58	8	147	▲297	221	1,538	85	
	法人税および住民税	18	8	69	1	10	22	25	0	0	8	22	1	37	20	2	17	2	0	262	15	
	当期純利益	9	78	92	0	3	67	21	1,000	▲11	3	29	▲40	45	▲78	6	130	▲299	221	1,276	71	
2. 貸借対照表																						
資産	流動資産	630	925	562	324	182	1,839	807	1,711	248	354	561	333	758	254	470	851	159	186			
	固定資産等	578	1,214	717	912	2,056	118	434	67	90	214	344	707	528	335	314	283	58	55			
資産の部 合計		1,208	2,139	1,279	1,236	2,238	1,957	1,241	1,778	338	568	905	1,041	1,286	589	784	1,134	217	241			
負債	流動負債	180	455	574	587	1,232	560	495	2,301	259	237	340	380	486	403	539	455	403	375			
	固定負債	347	94	86	638	9	0	112	155	59	36	110	163	62	172	60	54	22	231			
負債の部 合計		527	549	659	1,225	1,241	560	607	2,456	318	273	450	544	548	575	599	509	425	606			
資本	資本金	454	1,570	160	100	100	1,065	349	31	630	367	712	550	679	400	315	220	605	2			
	資本剰余金等	0	147	0	240	932	0	31	0	260	0	0	0	0	0	0	52	454	0			
	利益剰余金	227	▲127	460	▲329	▲35	332	255	▲708	▲870	▲72	▲257	▲53	59	▲386	▲130	353	▲1,266	▲366			
資本(純資産)の部 合計		681	1,590	620	11	997	1,397	635	▲677	20	295	455	496	738	14	185	625	▲207	▲364			

(単位:百万円、▲: 損失)

クラブ名		J2																										
		札幌	山形	水戸	栃木	群馬	千葉	東京V	横浜FC	松本	富山	岐阜	京都	G大阪	神戸	鳥取	岡山	徳島	愛媛	福岡	北九州	長崎	熊本	J2総合計		J2平均		
決算月		2013年 12月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2013年 12月期	2014年 1月期	2013年 12月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2013年 12月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期					
1. 損益総括																												
損益 総括	営業収益	1,071	1,041	508	876	469	2,330	1,236	1,152	939	701	576	1,930	2,786	1,960	646	1,034	1,211	547	871	686	718	680	23,969	1,090			
	広告料収入	432	258	189	474	217	1,515	534	579	386	393	266	1,235	1,696	682	268	439	821	217	324	272	248	278	11,723	533			
	入場料収入	330	202	90	145	84	353	204	177	199	84	74	260	465	339	99	161	105	56	180	88	132	118	3,944	179			
	Jリーグ配分金	103	99	90	95	93	100	89	92	99	92	90	107	105	104	112	98	95	90	94	90	100	100	2,137	97			
	アカデミー関連収入	54	61	38	64	4	55	174	46	5	52	41	134	138	231	40	75	58	67	171	50	36	23	1,618	74			
	その他収入	152	421	101	99	72	307	235	258	249	80	105	194	382	604	126	261	133	117	102	186	203	161	4,549	207			
	営業費用	1,236	1,030	507	955	494	2,217	1,303	1,130	939	679	611	1,681	2,839	2,401	635	994	1,148	545	966	673	728	671	24,381	1,108			
	チーム人件費	359	468	230	410	163	994	357	482	368	273	241	692	1,486	1,160	207	411	601	247	390	249	229	261	10,278	467			
	試合関連経費	212	63	35	76	58	146	144	71	100	59	67	135	233	187	44	70	52	21	73	48	115	42	2,051	93			
	トップチーム運営経費	176	137	65	110	78	262	260	185	115	123	101	156	194	304	61	81	142	83	161	99	78	103	3,074	140			
	アカデミー運営経費	59	64	10	32	9	73	91	38	5	22	33	145	114	115	27	18	28	9	58	26	26	17	1,019	46			
	女子チーム運営経費	0	0	0	0	0	66	36	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	104	5			
	販売費および一般管理費	430	298	167	326	186	676	415	353	352	202	169	553	812	635	297	414	325	183	284	251	279	248	7,854	357			
	営業利益	▲165	11	1	▲78	▲25	113	▲67	22	0	22	▲35	249	▲53	▲441	11	40	64	2	▲95	14	▲9	9	▲411	▲19			
	営業外収益	180	0	2	1	11	3	0	0	4	1	0	17	29	12	0	0	6	0	19	0	0	5	290	13			
	営業外費用	7	0	1	2	3	8	2	0	0	0	9	3	▲35	5	8	5	1	0	10	2	2	2	35	2			
	経常利益	8	11	2	▲79	▲17	108	▲69	23	4	23	▲44	263	11	▲434	3	35	68	2	▲86	12	▲11	12	▲155	▲7			
	特別利益	0	0	2	35	0	0	0	0	0	0	140	0	0	68	0	0	0	0	0	0	0	0	245	11			
	特別損失	0	0	0	1	0	0	1	18	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	23	1			
	税引前当期利益	8	11	4	▲45	▲17	107	▲70	5	4	23	96	263	11	▲369	3	35	68	2	▲86	12	▲11	12	66	3			
法人税および住民税	2	0	0	2	1	10	0	2	2	0	8	112	74	1	1	1	34	2	1	1	0	2	256	12				
当期純利益	6	11	4	▲47	▲18	97	▲70	3	2	23	88	151	▲63	▲370	2	34	35	0	▲87	11	▲11	10	▲189	▲9				
2. 貸借対照表																												
資産	流動資産	618	131	142	258	108	311	376	355	163	224	125	943	299	383	23	386	602	168	86	105	192	164					
	固定資産等	67	12	19	22	11	1,064	22	138	59	4	4	102	436	227	439	34	158	35	259	28	26	13					
	資産の部 合計	685	143	161	280	119	1,375	398	493	222	228	129	1,045	735	610	462	420	760	203	345	133	218	177					
負債	流動負債	165	118	82	331	175	509	309	360	52	169	202	542	516	240	184	283	197	19	328	101	185	200					
	固定負債	551	0	19	12	0	325	80	101	3	4	20	30	50	1,991	225	10	20	0	45	43	2	38					
	負債の部 合計	716	118	101	343	175	835	389	461	55	173	222	572	566	2,231	409	293	217	19	373	144	187	238					
資本	資本金	876	—	80	305	234	490	276	344	128	97	147	3,605	10	98	160	98	409	209	126	156	221	273					
	資本剰余金等	0	—	103	105	76	390	237	115	0	28	145	0	0	563	96	36	0	▲1	196	0	0	0					
	利益剰余金	▲907	—	▲123	▲473	▲366	▲340	▲504	▲427	39	▲70	▲385	▲3,132	159	▲2,283	▲203	▲7	134	▲24	▲350	▲166	▲190	▲334					
資本(純資産)の部 合計		▲31	25	60	▲63	▲56	540	9	32	167	55	▲93	473	169	▲1,622	53	127	543	▲28	▲11	31	▲61						

クラブ名		新入会クラブ												
		盛岡	秋田	福島	町田	YS横浜	相模原	長野	金沢	藤枝	讃岐	琉球	新入会 クラブ 総合計	新入会 クラブ 平均
決算月		2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 3月期	2014年 1月期	2013年 12月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期	2014年 1月期		
1. 損益総括														
損益総括	営業収益	75	188	207	363	145	111	308	278	95	220	66	2,055	187
	広告料収入	39	103	134	204	22	81	228	189	71	90	23	1,184	108
	入場料収入	0	11	11	32	7	15	23	8	6	25	5	143	13
	Jリーグ配分金	0	6	0	52	3	0	7	0	0	1	0	69	6
	アカデミー関連収入	18	27	16	6	93	0	11	21	0	26	9	227	21
	その他収入	18	41	46	69	20	15	39	60	19	78	29	434	39
	営業費用	84	207	204	357	147	115	337	277	126	219	146	2,219	202
	チーム人件費	37	70	52	115	2	35	154	100	32	84	59	740	67
	試合関連経費	3	4	15	32	5	7	7	22	6	14	3	118	11
	トップチーム運営経費	8	29	32	49	22	15	57	41	17	37	14	322	29
	アカデミー運営経費	3	12	12	13	28	0	13	13	0	10	3	107	10
	女子チーム運営経費	0	2	0	0	2	0	8	0	0	0	0	12	1
	販売費および一般管理費	33	90	93	148	88	58	98	101	72	74	66	920	84
	営業利益	▲9	▲20	2	6	▲2	▲4	▲29	0	▲30	1	▲80	▲164	▲15
	営業外収益	6	26	1	1	3	4	0	2	4	5	3	54	5
	営業外費用	1	2	0	4	0	1	0	0	0	2	0	10	1
	経常利益	▲4	4	3	3	1	▲1	▲29	2	▲26	4	▲77	▲120	▲11
特別利益	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	
特別損失	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
税引前当期利益	▲4	4	5	3	1	▲1	▲29	2	▲26	4	▲77	▲118	▲11	
法人税および住民税	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	
当期純利益	▲4	4	4	2	1	▲1	▲29	2	▲26	4	▲78	▲120	▲11	
2. 貸借対照表														
資産	流動資産	25	9	76	75	50	23	40	42	31	119	73		
	固定資産等	18	18	6	36	7	4	2	23	65	29	9		
	資産の部 合計	43	27	82	111	57	27	42	65	96	148	82		
負債	流動負債	23	31	37	19	40	23	27	18	34	111	39		
	固定負債	14	83	6	72	0	4	0	0	3	7	0		
	負債の部 合計	37	114	43	91	40	27	27	18	37	118	39		
資本	資本金	58	56	39	142	—	9	74	100	116	77	121		
	資本剰余金等	0	0	0	95	—	0	9	0	113	76	0		
	利益剰余金	▲52	▲143	0	▲217	—	▲8	▲68	▲53	▲169	▲123	▲78		
	資本(純資産)の部 合計	6	▲87	39	20	17	0	15	47	60	30	43		

※琉球の会計期間は平成25年5月23日から同26年1月31日まで。

【注】※端数処理の影響で合計値が一部一致しないところがある。J1・J2・新入会クラブの総合計数値は、各クラブの百万円単位の金額を単純に合計したものである。

※上記数値はクラブ運営法人単体の数値であるため、アカデミー(育成・普及)事業を、クラブ運営法人と直接関係のあるNPO法人や一般社団法人に移管している場合には、アカデミー関連収入および費用が上記数値に含まれないことがある。

※固定資産等の区分には、繰延資産も含めて表示している。

備考: 2005会計年度分より、クラブ別の個別情報を発表している。06会計年度分からは、全クラブの全ての項目を開示。

Jリーグ クラブライセンス制度および審査方法について

クラブライセンス制度の施行によって実現したいこと

Jリーグは「ファイナンシャル・フェアプレーが世界一実践されているリーグ」を目指している。

- 「業界として安定した競技環境を保证すること」が、リーグブランドの向上につながる。
- クラブライセンス制度(財務基準)の趣旨は、クラブの財務の健全性を、クラブ自身が把握し、クラブ自身がもって対応することにより、リーグ全体の財務健全性を維持・向上することである。
- 下図のような場合は、二つの側面からライセンスの交付が難しくなる。
 - ①ライセンス交付を判定するための客観的な情報がない。
 - ②そもそも「財務健全性の確保」という制度趣旨に反する行動である。(クラブの経営が一方向に安定しなくなる)
- クラブが上記趣旨を理解し、期限の認識を持って、財務状態の改善に取り組むことが重要である。また、下図のような考え方で臨むクラブを抑制していく必要がある。

クラブライセンスは客観性のある判定と、制度趣旨にのっとりた運用を行う

クラブライセンス

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
予算確定		開幕			申請			判定			シーズン終了	決算

前年度決算で赤字や債務超過の場合、ライセンス交付判定後に「この間に増資したり、収入を獲得したりすることで、債務超過は解消できます」と言われても、審査員は判断のしようがない(客観的証拠がない)。

今期における財務基準審査方法について

2013年度に債務超過または2期連続赤字のクラブは、14年9月末のクラブライセンス交付判定前に、債務超過または3期連続赤字を解消

クラブライセンス

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
予算確定		開幕			申請			判定			シーズン終了	決算

この時期に広告料収入の見込みをする

予算達成か、未達成かを判断する

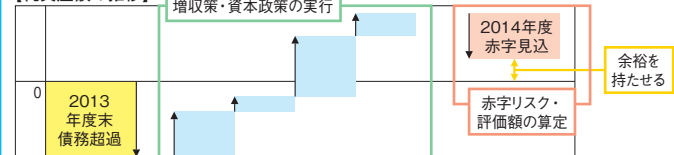
費用の削減はすでに難しくなっている(シーズンが始まっている)

早急に対策を実行し、債務超過を解消できる状態にし、判定を迎える

決算確定後に債務超過にならないようにする

【注】収入(予算)の裏付けか、債務超過を回避できる余地があれば、高額選手への投資を行っても、ライセンス交付の判定には影響しない。クラブライセンス制度は投資を否定せず、経営規模に見合わない無謀な支出を抑止するものである。

【純資産額の推移】



- ① 2013年度の債務超過額が決まる。
- ② 債務超過(および3期連続赤字)を解消するための、具体的で合理的な計画を立て、それを地元(自治体や支援企業など)に説明の上、実行に移す。
- ③ 2014年度予算に対する達成度を評価し、収入未達の場合の赤字リスクを推計する。
- ④ 上記全てを基に、2014年度末に債務超過(3期連続赤字)を解消できるか否かを見積もる。

自国リーグで磨かれる「自分たちのサッカー」

増島 みどり (ますじま みどり)



PROFILE

神奈川県出身。スポーツ新聞記者を経て独立。サッカー日本代表をフルカバー。オリンピック、各世界選手権など海外取材も多い。1998年のFIFAワールドカップフランスに出場した日本代表を描いた『6月の軌跡』でミズノスポーツライター賞を受賞するなど著書多数。ブラジルW杯前にはアルベルト・ザッケローニ監督を取材した『ゆだねて束ねる』を刊行。法政大学スポーツ健康学部講師。

グループステージ第3戦が行われたクイアバのホテルは、レプリカユニフォームを着たコロンビアサポーターに占拠されていた。朝食会場は見渡す限り黄色いユニフォームで埋め尽くされ、特に、ビュッフェが並ぶ「エリア内」の密集度は凄まじい。出来たてのスクランブルエッグやハムが運ばれるたび、皿を片手に席を立つ彼らの鋭いスタートダッシュに圧倒され、日本人は皆遠慮し、外のテラスで静かにコーヒーを飲んでいる。

そんな光景を見ながら、ああ、とため息が漏れる。朝食会場の「バイタルエリア」にさえ突っ込んで行けない自分が、どうして香川真司に「怖がらずに勝負！」などと言えようか、と。そして自分自身の中に潜む、か弱き「日本代表」に気付かされる。他の国際大会取材とは違い、ワールドカップ(W杯)では幾度となく、こんな感覚を味わうものだ。

「きょうはコロンビアが3-1で勝つよ」

「ハイハイ、そうですね」と適当に答えても、代表の話になると彼らはしつこい。

「ハメス(ロドリゲス)がハットトリック。でもがっかりしないで。日本にはプロリーグがないのに良くやってる…あつ、あるんだよね、何だっけ?」

「ありますよ、Jリーグ!。ジャパンのJですっ」としつこく説明したが、今度は向こうが適当だった。仕方ない。今大会初の8強に進出し、サッカー世界地図における存在感を増した国にとって、プロ20年目の途上国への標準的な認識なのだろうから。

ドイツとベルギーの10年強化プランを支えたのは協会とリーグの一体感

5大会連続出場を果たし、過去史上最多の12人もの海外組をそろえた日本代表が、勝点わずか1に終わった教訓は、敗因の分析という各論のみではなく、その国のサッカーを根っこから支える「リーグ」の存在感、総論を再検討すべき点にある。24年ぶりに優勝したドイツとの比較は尚早かもしれない

が、14年前、2000年の欧州選手権グループステージで最下位に終わった際、同国が抱いた危機感は学べるだろう。

「10年強化プラン」を主導したのはブンデスリーガである。36クラブにユース世代のアカデミー保有を義務付け、ドイツサッカー連盟は11~18歳の若手発掘と育成に国内366カ所にトレセンを設置。00年には7だったサッカー専用スタジアムは06年のドイツW杯(ドイツは3位)後15に。リーグの活性化で、平均入場者数は現在世界最多の4万人を突破した(J1リーグの昨年平均は1万7226人)。クラブには自国選手12人、うち半数はホームタウン出身の選手との契約を義務付けている(データはブンデスリーガによる)。

00年の欧州選手権で自国開催(オランダとの共催)ながらグループステージで敗退したベルギーもまた、国内の強化体制を見直す10年プランを確立。今大会28年ぶりに8強に進出し果実を手にした。ドイツとは異なり、若手を欧州の有力クラブに輩出して育てる強化は移民の多い国ならではの政策だ。両国の根本的な共通点は、協会とリーグの一体感を伴った連携であり「危機感の共有」にある。敗因分析はピッチ内だけではなく、ピッチの外にこそあると考えられるかどうか、JリーグとJFAも信念を問われる時だ。

必ずしもつながらない。今大会、日本代表について「自分たちのサッカー」といった表現が躍ったが、「自分たちのサッカー」とは本来、厳しい自国リーグにおいてこそ磨かれ明確になるものであって、時の代表監督が示すものではない。

日本代表は、1998年のW杯初出場以来16年間で17試合を戦ってきたが、今大会で初めて経験した試合展開がある。コートジボワール戦では(初戦で)初めて序盤16分に得点しながら勝てなかった。ギリシャ戦でも初めて相手に、しかも前半で退場者が出たにもかかわらずとどめのパンチを繰り出せずドローに終わった。例えばJリーグでは逆転勝利の割合が14.4%(2011~13年)と非常に低い。こうした戦い方、勝ち方のバリエーション不足は、日本代表が、W杯過去17試合で一度も逆転勝ちしていない事実と強くリンクしている。試合巧者になるには経験が足りない。

選手にはJリーグで戦う厳しさを求め、リーグ、協会は強化計画をつくり、メディア、サポーターは活性化を後押しする。

それがかなえば、Jリーグを知らなかったあのコロンビアサポーターにもいつか「きょうは3-1で日本が勝つよ」と言える日が来るだろう。いつになるか果てしないけれど、目指す道は目の前に。

自分たちのサッカー、は自国リーグに存在する

「海外でプレーする選手が増えれば」と代表の強化を国外のクラブでの経験値に求めた時代も一区切りついた。海外の、しかも強豪クラブに所属する選手の数が増えても、世界でわずか32カ国しか出場できないW杯で「自国の」サッカーをどう強烈に示すか、その大きなテーマには



FIFAワールドカップ優勝のドイツ。強化プランを主導したのは国内リーグのブンデスリーガだ
© 共同通信社

